

# 李平書と20世紀初頭の日本

薄 培 林

## Li Pingshu (李平書) and Early 20<sup>th</sup>-century Japan

BO Peilin

Li Pingshu (李平書) is one of the famous industrialists in modern China. He has come to Japan for five times and spent three years as exile refugee in Japan after 1911 Xinhai Revolution. Japan played an important part in his later life. However, former researchers focused mainly on Li Pingshu's contribution to Xinhai Revolution, particularly on his activities in retaken of Shanghai, or on his dedication as a pioneer of Shanghai's modern development. Li's experiences in Japan remain almost untouched. This paper tracks down Li's historical trail on Sino-Japan relationship in late Qing Dynasty and early Republic of China, through records of his participation of the Nanyang Commodity Exposition in 1910 and the Tokyo Taisho Exhibition in 1914, as well as Li's connection to Japanese financial circle. The paper also delineates an unknown side of this important figure in Shanghai modern history, by investigating Li's relation with Japan in 20th -century and his activities in Japan, based on his autobiography and historical records in Japan.

### Key Words:

Li Pingshu (李平書), Nanyang Commodity Exposition of 1910, Tokyo Taisho Exhibition in 1914, Sino-Japan relationship in late Qing Dynasty and early Republic of China

## はじめに



図1 上海蓬萊公園にあった李平書銅像

李平書（1854-1927）は、名は鐘珏、字は平書、号を且頑と称す、近代上海の有名な「紳商」である。李は初めて上海の地方自治を提唱して推進させた人物で、辛亥革命の際に上海での蜂起に携わった。1903年より上海で、江南製造局提調兼中國通商銀行会長、輪船招商局・江蘇鐵路公司理事などを歴任した。その間に彼は、公共事業にも力を注ぎ、医学会の創立、女子学校の開校、病院や保険会社の開設など一連の社会改良活動を行った。また近代工業に投資し、水道工場・発電工場を創設するなどで民族工業を支え、上海の発展に大きく貢献した。熊月之氏の指摘によると、李平書という上海近代史上の重要人物に対して、上海

人は最も崇高な敬意を表している<sup>1)</sup>。

李平書に関しては、数十年来少なからぬ研究がある<sup>2)</sup>が、しかしそれは、ほとんど李の階級性の分析や、辛亥革命とくに上海蜂起における李の功績、或いは上海の近代化発展への李の貢献、経済界・民族工業界・中医学界における先駆的な役割などを論述したものであり、いずれも李の自伝及び『字林滬報』を主宰した時に執筆した論説を踏まえた考察で、基本的に中国国内の史料しか使用されていない。ところが、李平書の自伝『且頑老人七十歳自叙』をめくると、李は生涯の中で数回日本に渡り、1914年の東京大正博覧会に参加したのみならず、1910年に南

1) 熊月之「論李平書」、上海『史林』2005年第3期、第1頁。

2) たとえば、李平書について総合的に検討した研究には、熊月之前掲「論李平書」、馮紹霆「李平書略論」（上海『上海研究論叢』第8輯、1993年）、田仁「李平書在上海光復前後」（湯偉康等編『上海軼事』、上海文化出版社1987年）、杜黎「淺論李平書」（復旦大学等編『近代中國資産階級研究續輯』、上海復旦大学出版社、1986年）、閔誌昌「李平書小傳」（臺北『傳記文學』第54卷第3期、傳記文學雜誌社、1989年3月）、史美俊『上海電業巨星李平書』（趙雲聲主編『中國大資本家傳』第8卷、時代文芸出版社、1994年）、及び李平書と同時代的士紳である姚文彬による『李平書行狀』（上海市文史資料工作委員會編『辛亥革命七十周年——文史資料紀念專輯』所収、上海人民出版社、1981年）等があげられる。また、沈雲龍「陳英士、李平書與上海光復」（前掲『傳記文學』1980年6月）、季鵬ほか「陳英士李平書之交與滬寧光復」（合肥『安徽師範大學學報（人文社会科学版）』、2007年第5期）等の研究論文や、『浦東開發』という雑誌にある一連の李の生涯・事績を紹介する雑文、及び上海浦東協政のHPに2007年以來掲載された一連の李に関する論述（“政協史料” <http://www.pdxx.gov.cn/pdxx/moreinfo.aspx?siteid=1&categoryNum=0110>）等がある。なお、周松青『上海地方自治研究（1905-1927）』（上海社会科学院出版社、2005年）も李と「上海拆城案」の関連について詳細に論述している。

京で開催される南洋勸業会の期間中及び民国初期に日本財界人と接触したことも見られる。上海ブルジョアジーの代表人物としての李平書にとって、日本という国がその後の半生においてかなり大きな比重を占めているといえる。にもかかわらず、今までの研究には、日本にいる間の李の活動について触れたものが管見の限り一つもないようである。その空白を埋めるために、本論は李平書の自伝を手がかりにしながら、日本側の史料や記録を発掘し、それを根拠にして李平書と20世紀初頭の日本との関連を考察する。日本での李の活動、特に日本と中国での二回の博覧会への参与の事実を整理することによって、李平書という近代上海史の重要人物の知られざる一面を浮き彫りにし、清末民初の日中関係における李平書の足跡を明らかにしたい。

## 二 五回の来日

李平書はあわせて五回も渡日したことがある。一回目は、袁世凱が中華民國臨時大總統在任中の1912年9月に、上海南北商会の代表として推挙され、明治天皇の葬儀に参列するために渡日した。二回目は、1913年旧暦の四月に、李は上海の銀行家である沈縵雲（1869-1915）に依頼されて銀行の資金調達のため東京に二週間ほど滞在した。三回目は第二革命（二次革命）勃発後。第二革命の間に李平書が「上海保衛団」団長に就任して上海地域の治安を維持したが、後に情勢を挽回できないことを悟り、旧暦六月二十日（西暦7月23日）に租界に撤退して、翌日に渡日した。袁世凱政府より指名手配令状が出されたので、租界側は李の居留権を取り消した。よって李は三年間近く日本に亡命し、1916年旧暦三月初め（西暦4月上旬）にようやく上海に戻った。これは李の一番長い日本滞在であった。四回目は1918年旧暦の三月（西暦4から5月までの間）、孫を二人連れて慶応義塾に留学させるために来日した。それと同時に李は、宋の慶歴年間の『淳化閣帖』を日本に携えて五百部ほど精密印刷した。その後同年旧暦四月下旬には上海に戻った。しかし、物価高騰のため印刷出版作業が契約通りに完成できなかったので、1919年旧暦三月（西暦4月）、李はその解決のために再度日本に渡った。工期を延長し、資金を追加するなどして、翌年に印刷を最終的に完了させた。この五回目の来日は、折よく春休みだったので、李平書は孫二人とともに各地を観光し、中村不折・田口米舩等の書画家を訪ねるな



図2 李平書の『且頑老人七十歳自叙』（上海浦東新区檔案館所蔵）

ど、書画について日本の大家と交流をはかった。旧暦四月下旬に帰国した。この五回の日本滞在の詳細について、李は自伝の『且頑老人七十歳自叙』においていずれも記述しており、特に一回目と三回目のことが詳細に記されている。

一回目の渡日は明治天皇の葬儀参列のためであった。この挙は、実業家の近藤廉平が日本観光実業団を率いて訪中したことに由来する。李平書はその経緯を次のように語っている。

上年八月（西暦1912年9月——筆者）、余既卸民政總長任、適日本明治天皇安葬、上海南北商會公舉余前往送殯。（中略）前年南洋勸業會開幕、日本觀光團來華、余亦在招待之列。团长近藤廉平君、爲日本郵船会社長、其人明達和藹、與余相善。嘗有赴日報聘之說、此次送殯之舉、所由來也。<sup>3)</sup>

即ち、李は、1910年の南洋勸業会で日本から来た訪問団を接待した時、日本郵船会社社長の近藤廉平と友人になり、その因縁で明治天皇の葬儀に招かれたのである。

近藤廉平（1848-1921）は、日清戦争後の1895年から1921年まで26年あまり日本郵船会社の三代目社長を務めた。在任中、欧州・北米・豪州の三大遠洋定期航路を開設したほか、日本の近海航路を充実させ、日本経済の海外進出の運輸的基盤を確立した功績から、渋沢栄一とともに実業界の二大元老とされている<sup>4)</sup>。1910年、清朝最大規模の内国博覧会たる南洋勸業会が開催されていたが、近藤は团长として、「赴清観光実業団」を率いて参会するために中国に渡った。一行は1910年5月5日に出発し、朝鮮を経て東北、天津、北京、武漢、南京、蘇州、杭州等各地を巡遊して、至る所で当地の官僚や士人に歓迎された。近藤は中国での交友が清朝高官から革命志士、実業家、学者、南北各地の商会リーダーまで非常に幅広いもので、李平書もおそらく近藤の「会心の友」の一人であろう。「赴清観光実業団」は中国で大きな影響を及ぼしたようで、清朝側は各地の商務總會会員の中から65名を選出し、「赴日考察実業団」を結成して日本を答礼訪問しようとした。近藤は、これを日中両国財界人の交流を深める良い機会として認識し、日中両国実業家の提携を促進させるための社交団体「同朋会」を直ちに組織して清国の訪問団を迎える準備を整えた。ところが、辛亥革命勃発によって、この計画は「無期限延期」になってしまった<sup>5)</sup>。ゆえに、2年後に葬儀参列という措置が補償的に行われたわけである。

3) 李平書『且頑老人七十歳自叙』（以下は『自叙』と略称す）、沈雲龍主編『近代中國史料叢刊續編45、46 第五輯』、台北、文海出版社、1974年）、526-528頁。

4) 近藤の生涯について、末廣一雄『男爵近藤廉平伝』（ゆまに書房、1998年）に詳しい。

5) 同上、「第十七章 赴清観光実業団長」。

1912年9月上旬、李平書は寧波出身の商人葉子衡と通訳の周容甫をつれて上海を發ち、日本郵船株式会社の「春日丸」に乗船してまず長崎に到着した。中華商會會長に招待され、その日の夕方から神戸に赴き、神戸で葉子衡宅に泊まった。翌日、神戸領事の王稚虹氏や華僑商人の陳源來氏と面会してから東京に赴いた。東京滞在中、葬儀参列以外に近藤廉平や白岩龍平（日清汽船会社取締役）、大倉喜七郎（1882-1963）等の日本実業界の代表者と会談した。この時の詳細が李平書の自伝に記載されている<sup>6)</sup>。上海で鉱業等の事業を經營し、仕事の関係でよく赴日する葉子衡は、1905年5月に日本国籍を取得して神戸に住居を構えた<sup>7)</sup>。李平書は日本にいる間に、生活の面など多くのことで葉子衡の世話になった。

1913年3月、宋教仁が暗殺され、孫文ら革命党人は袁世凱を討伐するための第二革命（二次革命）を起こした。強く「討袁」を主張する国民党籍の銀行家沈縵雲は、革命のために東奔西走し、資金調達に積極的に活動していた<sup>8)</sup>。李平書とはかつて地方自治機構の同僚であった上に、沈は商團副會長でもあったので、二人は気心の知れた友人同士であった。1913年旧曆の四月、李平書は沈縵雲に依頼されて、日本語のできる上海資本家張趾麟（元本溪湖煤礦總辦）を携えて資金調達のために東京に赴き、二週間ほど滞在した。神戸を経由したときには再び王稚虹と面会し、王稚虹から、年末に東京で開催される書画展覽会に出品を依頼された李平書は、日本への書画の持ち込みが免税になることを知り、喜んで参加を承諾した<sup>9)</sup>。第二革命が失敗した後、上海地方リーダーのほとんどが「助乱」の罪で袁世凱に指名手配されたが、李平書も、松江の討袁軍が上海に入って龍華火薬工場を占拠できたのは李の手紙によって北軍の防衛線を通過できたからであるとして「助攻」の罪名で指名手配された<sup>10)</sup>。幸いにも、李平書はすでに戦いが起きた後の7月24日（旧曆六月二十一日）に日本に渡っていた。これは李の三回目の渡日で、最も長い日本滞在でもあった。

辛亥革命の上海蜂起のとき、李平書は上海「紳商」の代表人物として、この集團の利益ため

---

6) 『自叙』, 528頁。「同行者葉君子衡爲副, 周君容甫爲通譯。七月下旬, 乘春日丸抵長崎埠, 中華商會會長蘇道生君, 爲故友夢漁君之長子, 款待周至。是夕乘車赴神戸, 即住子衡宅內。晤神戸領事王稚虹君、僑商陳源來君, 稚虹爲總工程局工程主任陸生君之長子。翌日, 即赴東京。近藤君已委白岩龍平君等在車站迎接余等, 一一相見畢。大倉喜七郎自禦新制之精美汽車載余等赴帝國大旅社住宿。未幾, 近藤君禦禮服來晤, 談良久去。連日宴會甚煩, 送殯禮畢回滬。」

7) 淺川晃広『近代日本と帰化制度』(溪水社, 2007年), 158頁。

8) 沈縵雲について、沈子高「沈縵雲の一生」(前掲『辛亥革命七十周年——文史資料紀念專輯』所收)などを参照。

9) 『自叙』, 529頁。

10) 李達嘉「從『革命』到『反革命』—上海商人的政治關懷和抉擇, 1911-1914」(台湾中央研究院近代史研究所『近代史研究所集刊』23期上, 1994年), 280頁。

に革命党に協力して清朝打倒の闘争に携わり、人生の最も輝いた一頁を刻んだ。第二革命の時、李は再びこの集団の利益に東奔西走したものの、歴史のいたずらか、日本で二年あまりの亡命生活を送る目に遭わされた<sup>11)</sup>。だが、亡命生活の中で、李平書は非常に有意義な経験をした。それは、1914年に東京の上野公園で開催された東京大正博覧会に参加・出品して、賞まで獲得したことである。

『且頑老人七十歳自叙』によると、1913年7月下旬、李平書は神戸に到着し、葉子衡宅にしばらく身を寄せる。多くの報道関係者が取材に来たが、李は、自分はもう「不談国事」（国事を語らない）と言い記者たちを帰らせたという。旧暦の九月上旬、李平書は神戸倶楽部で書画会を開き、東京、京都、大阪から多くの書画家が鑑賞にきた。旧暦の十月には東京に居を移し、「有楽町一丁目」で家を借りた。十一月、即ち西暦の11～12月の間に、東京の上野公園美術協会で書画展覧会を三週間開催し、延べ815点の書画を展示した。1914年になってから、上海から親戚が来日したので、李平書は親戚らとともに物見遊山をして、「繁華京國厭緇塵，山色湖光最可人。何日海濱容息影，須磨蝸舍寄閑身」というような当時の心情を語る詩を数多く作った。この年にちょうど東京大正博覧会が開催されたので、李平書は東京の友人の紹介で博覧会に出品参加することになった。李は、展覧館の外国館の中から場所を借りて、書画など1400点あまりを出品・陳列した。そして、この年から、李は豊倉という日本人技師を招聘して珂羅版でいろいろな書画を印刷させる。その後、東京の家賃が高かったため、李は横浜で一軒の家を借りて、同年旧暦の四月に引っ越していった。1915年旧暦の四月、賃貸契約満期のため、また横浜から「神戸中山手通一丁目三番地」にある葉子衡宅に引っ越して、さらに神戸でもう一軒の家屋を借りて「平泉書屋書画舗」を創設した。旧暦の五月には、大阪、奈良、箕面、京都等を観光した。神戸在住の日々には、李平書は書画を書き詩を作り、悠々自適な隠居生活を送っていた。

ところが、李平書は本当に「国事を語らず」、その「真愜室雜詠序」と題する文に書かれたように「独り座り歌を嘯き、陶然として自樂し、帝王卿相は浮雲の如し」という隠遁者の心境になったのであろうか。実際には、李は日本に亡命しているときに、徹底的に消極的になり革命を離れたのではなく、中国国内の政局の変化や革命情勢の発展に常に留意していた。神戸で、李は同郷鈕惕生（永建）等の革命志士と密接に接触しており、この時期では、「倒袁」（袁世凱打倒）が李の目標の一つとなっている<sup>12)</sup>。李平書はまた次のように書いている。「自癸丑出亡後、

11) 馮紹鏗、前掲「李平書略論」、303頁。

12) 『自叙』、554頁。「聞北京籌安會成立，袁氏竟欲為帝，為之扼腕。適鈕惕生君來居神戸，日與商議倒袁之策。不倒袁，民國不五稔矣。是冬聞雲南起義，鈕君偕何君子均先反國，約余明歲回滬。」

不談国事者二年。去冬聞袁氏稱帝，憤懣之余，輒中夜不睡。自三月帰国，從鈕君（惕生）等共倒袁<sup>13)</sup>，1916年4月上旬，李平書は船で故郷上海に戻り，鈕惕生等とともに「倒袁」のために戦いはじめる。これで二年九ヶ月にわたった長い日本亡命生活にピリオドが打たれた。しかし当時，国民党の実力が弱く，袁世凱死後でも政権はやはり北洋軍閥に握られていた。この現実の中で李平書は次第に失望していった。<sup>14)</sup>

横浜在住のとき，李平書は偶然に『申報』から，山東鉄道警察改良計画に参考を提供するために，日本の上海駐在総領事館が滬寧滬杭鉄道の警察規章について調査を行っていることを知った。そこで1914年末に，李平書は一通の書簡を書き，古い友人で上海總領事館勤務の西田氏を通して，上海總領事館總領事の有吉明氏に，南北対立で「乱党」とされて指名手配された，日本亡命中の元津浦鉄道南段警察長鄭誠元を推薦した。李平書の書簡は，鄭誠元の職歴，業績及び李と知り合った経緯，指名手配された原因などを詳細に紹介したほか，書簡のはじめにおいて津浦鐵路南段警察規章の要点二十条を列挙していた<sup>15)</sup>。総領事の有吉明は，この書簡の中の「津浦鉄道南段警察概要は支那鉄道巡警組織及管理法等に対して参考資料の価値有り」<sup>16)</sup>として，李の書簡を非常に重要視し，その内容を日本語に翻訳して当時の外務大臣の加藤高明に送った。

これは李平書の日本亡命生活の中の一つのエピソードに過ぎないが，最も有意義なのは，東京大正博覧会に参加し，「平泉書屋陳列処」を開設して出品したことである。

### 三 李平書と東京大正博覧会

李平書は古参資本家として商業発展における博覧会の意義をよく知っており，東京大正博覧会に参加する前に中国ですでに数回も「賽会」に参加したことがある。1908年旧暦の七月，李はイギリス租界の福州路の聚豊園旧跡で「中國品物陳列所」（「賽珍会」と俗称す）を創設した。1909年旧暦二月には「賽珍会」を張叔和の味菴園（張園）に移転させた。「晚清上海市民の最大な公共活動の場」と言われた張園は，また「賽珍会」の転入で物品の展示即売の場所となり，舶来品や各種逸品ぞろいで賑わっていた<sup>17)</sup>。

13) 同上。

14) 馮紹霆「李平書其人其事」，上海市檔案館『檔案與史学』1994年第1期，47頁。

15) 李のこの書簡に記された日付は「民国三年十二月二十四日」。アジア歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp/>，reference code: B03050106800。有吉明『7 鐵路巡警ニ関スル調査/3 大正4年1月28日から大正4年2月19日』から抄録。

16) 同上。有吉明「鐵路巡警取調方ニ関スル件」（1915年1月28日）。

17) 熊月之「張園 晚清上海一個公共空間研究」，上海市檔案館『檔案與史学』1996年第6期，35頁。

1908年、南洋大臣兼兩江總督の端方と江蘇巡撫陳啓泰は、「實業を振興させ、民の智を開通する」ために、南京で「南洋第一次勸業会」を開催するように連名で清廷に上奏した<sup>18)</sup>。清廷はそれを許可し、次の兩江總督張人駿を南洋勸業会会長に任命し、各省に出品と参加の準備を指示した。1909年2月24日（宣統元年二月五日）、「南洋勸業会事務所」が成立し、政府官僚のほか民間からは、張謇、李平書、虞洽卿、周金箴をはじめとする多くの財界有名人も直接勸業会の準備に携わっていた。日本の博覧会開催のやり方に倣って、開会前には各地で「出品協会」・「物産会」・「協賛会」がそれぞれ設立され、当地の出品や寄付、賛助などを担当し、膨大な準備ネットワークを作り上げた。

李平書は最初の準備段階から閉会後の善後処理まで、積極的にいろいろな仕事に携わった。まず、1909年上半期、李は松滬協賛会長に推挙される。同年4月11日（旧暦の閏二月二十一日）に上海協賛会が設立され、李は会の総理に就任する<sup>19)</sup>。10月22日（旧暦九月初九）、松江の醉白池で松郡物産会が開催される。10日間前後の展覧期間に来場者が数万人に達し、蘇州、常州、鎮江の物産会及び杭州協会からいずれも職員が松江へ見学に派遣されていた。松郡物産会の盛況は『申報』にも報道された<sup>20)</sup>。11月2日（旧暦九月二十日）、また張園において上海協賛会大会が開かれる<sup>21)</sup>。

1910年6月5日（宣統二年四月二十八日）、南洋勸業会は南京で幕を開いた。会場の規模は非常に大きく、出品は全部で約百万件、30万人近くの見学者が来場した。李平書は勸業会開幕前の1910年3月（旧暦二月）から閉会の11月29日まで凡そ九ヶ月の間に上海と南京の間を往復していた。李は会場の近くでデパートを経営し、建築会社を起こし、土地を購入して商店やホテルに使う建物を百三十軒あまり建てた。これらの事業や勸業会開催中の活動について、『且頑老人七十歳自叙』に記載されている<sup>22)</sup>。

勸業会開催中、アメリカや日本などの国から実業代表団の視察が派遣されてきた。日本の「赴清実業団」一行が勸業会に来たとき、李平書は勸業会開催の実務を担当した重役の一人として

18) 「兩江總督擬設南洋第一次勸業会官商合資試辦折」、『商務官報』戊申第33期（光緒三十四年十二月）。

19) 南洋勸業会日本出品協会編《南京博覧会各省出品調査書》（1912年）、『明治前期産業發達史資料 勸業博覧会資料』（東京、明治文献資料刊行會、1976年）（以下は『勸業博覧会資料』と略称）第208冊所収、9頁。

20) 『申報』1909年11月3日（宣統元年九月二十一日）。前掲『勸業博覧会資料 208』及び『申報』（影印本第103冊、第38頁）の記載では、松郡物産会の開幕日時は旧暦の九月初九日だったという。だが『且頑老人七十歳自叙』には「八月」とされている。恐らく後者が誤記だろう。

21) 前掲『南京博覧会各省出品調査書』、13頁。

22) 『自叙』、456頁。「是年、經營南京三牌樓勸業會場外模範馬路商場、設立上建公司、購地二十六畝余、建築樓房一百三十餘幢、為商店、旅館之用、創設鳳臺旅館一所。自二月至閉會、往來滬寧、仆仆道途、不遑啟處。」



「勸業会理事長」（「勸業會董事會長」）を務めており、日本の「赴清実業団」を招待した際に近藤廉平をはじめとする日本財界人と接触していた。閉会した後の善後処理にも、李は積極的に参与して主導的な役割を果たした<sup>23)</sup>。

南洋勸業会は清末中国が開催した最大規模の全国的な博覧会であり、中国近代文明の達したレベルを集中的に体现し、農工商業の発展を促進させ、中国近代社会に広くかつ深い影響を与えていた。上述の李平書の活躍から、この時期の李は博覧会事業の持つ意義について深く認識しており、勸業会開催に関するいろいろな事務的仕事を積極的に担当し、勸業会事業の社会的影響の拡大に大きく貢献したと言えよう。

1910年の南洋勸業会事業に参加した経験があったからこそ、日本亡命の間に、李平書は1914年の東京大正博覧会に積極的に参加したのかもしれない。李は次のように当時の様子を回想している。

是年、東京開大正博覧会於上野公園。香山林少東君與唐孜權君至好，余到東京由唐君介紹，備承關注。四明張伯岩君亦唐君之友，兩君俱在東京日久，情形熟悉，且極熱心。林君與大正會員田口米舫君善，遂介紹余入會，租地陳列。於是租定外國館內屋兩楹，為平泉書屋陳列處。函致三弟及趙君雲舫，采辦物品，並將大觀所有易於裝運之物，由三弟及雲舫並嚴君長慶等運東，就地制造櫥窗陳列，共計一千四百余種，而書画不與焉。是役也，共用去日金五千余元，售出貨物千余元，而平泉書屋之名頗震，是亦逃亡史中罕有之事也。<sup>24)</sup>

ここに言及される唐孜權、張伯岩などの人名はいずれも日本在住の華人書画家で、李平書は日本にいる間に彼らと親交があった。この回想文によると、李が大正博覧会に出品・参加できたのは明治期にかつて中国へ遊学した書道家の田口米舫（1861-1930）氏による紹介があったからで、この出品で「平泉書屋」が一躍有名になり、逃亡史上の希有のこととなる、という。

東京大正博覧会は、大正天皇即位を祝賀するために1914（大正三）年3月20日から7月31日まで東京都内で開催された。イギリス、ドイツ、スイス、フランス、アメリカなどの西洋諸国や、中国などのアジア国も参加した。主会場は東京の上野公園にあったが、ほかには青山会場、朝鮮館、台湾館、特別陳列館等の分会場もあった。この博覧会は名称に「東京」という地名が付いているものの、実際には世界的な博覧会である。会では当時世界で最も先進的なエスカレ

23) 前掲『勸業博覧会資料』第208巻、121頁。

24) 『自叙』、534-535頁。

ーター、ケーブルカー、日本産自動車などが展示され、当時の日本人は大正博覧会を「東京繁昌の大模型」、「帝国発展の縮尺図」とまで称していた<sup>25)</sup>。日本の実業振興方法を見習うために、中国もこの博覧会に参加した。湖北や江蘇、浙江の各地から参観団が組織され、会に参加して調査報告を出している。当時日本にいる中国留学生同人も自主的に調査会を組織し、中国実業界の参考にするために『東京大正博覧会調査書』を編著した。大正博覧会では特に外国館が設置されたので、李平書の「平泉書屋陳列処」もその中にあった。『東京大正博覧会調査書』によると、中国は今回外国館の出品以外に、日華貿易館への出品もあったが、外国館の中の中国出品だけを言えば、主な出品は陶瓷器類、毛皮類、棉織物及毛織物類、絹類、金漆竹木工藝品及び骨董類、缶詰類等、出品点数は総計約八百点という。さらに、『東京大正博覧会調査書』には続けて、外国館の中に「わが国政府の出品のほか、別に平泉書屋の個人出品が約300余点あり」と指摘されている<sup>26)</sup>。

『東京大正博覧会調査書』の「第四編 出品目録」には、平泉書屋の出品についての詳しい記録があり<sup>27)</sup>、そこから李平書が大正博覧会において書画以外にどんなものを出品したか知ることができる。その記録の分類を踏まえれば、李の出品状況を表1のように統計できる。

出品内容から見れば、平泉書屋の出品は中国が外国館や「日華貿易参考館」の中で展示した物品と内容的にほぼ同じで、そのほとんどが当時中国から日本へ輸出される物品である。上野公園の不忍池の北に位置する外国館は「第二会場本館」に属し、第二会場の最も重要な位置を占めていた。敷地の総面積は千八百九十六坪もあり、全会場の中の最も大きなパビリオンであった<sup>28)</sup>。『東京大正博覧会調査書』の中の外国館についての概論には、今回の博覧会における意義が指摘されている。それは、李平書の出品によって、中国の出品形式がほかの国と異なったこと、即ちほかの国は出品者がほとんど外国商人の代理店等であったのに対して、中国は今回の博覧会で中華民国政府に派遣されて参加したチームもあれば、李平書のように個人名義の出品もあったということである<sup>29)</sup>。

李平書の出品に対して評価をしていたのは、上述のような中国人による『東京大正博覧会調査書』だけではなく、日本政府の調査報告書も李平書の出品を記録しており、しかも詳細な説

25) 向上社編輯部編『大正博覧会と東京遊覧』（向上社、1914年）の「総説」。

26) 『東京大正博覧会調査書』（東京大正博覧会調査会、1914年12月）、「第五編第二十二章外国館」、449頁。

27) 『東京大正博覧会調査書』、「第四編 出品目録」の298～302頁。

28) 『東京大正博覧会調査書』、「第三編 各館概論」の第二章の「第四節外国館」、4頁。「此館位不忍池之北、占本場最要之區、建坪（方六尺）総数千八百九十六坪、為全建築中之最宏大大者也」。

29) 同上。「惟吾國異是、一系李某出品、一則中央派員出品也」。

表1 東京大正博覧会における平泉書屋の出品

品目		数目（種類）
第一部	天産品（谷物，豆，茶等）	67
第二部	製造品	
	1, 布類	27
	2, 絹錦毛織物類	25
	3, 草織類	3
	4, 金属類	26
	5, 陶瓷器類	46
	6, 木器，漆器，藤器類	14
	7, 紙扇及筆墨類	27
	8, 帽子類	6
	9, 印刷類	2
第三部	美術品	23
第四部	飲食品及び其の他	18
		合計 284（種類）

明と簡単なコメントを付け加えている。例えば、東京府が作成した『東京大正博覧会審査報告』（1916年刊行）の中の「外国館調査報告」に、李平書の名前と当時東京での住所「東京市麹町区有楽町一丁目」が数回登場している<sup>30)</sup>。外国館出展品の調査報告に「茶、コーヒー等」という類別があり、その類に「李平書の龍井緑茶、烏龍茶及び碧螺春が各一種」との記載がある。李の出展した酒類について、次のように日本人の視点から評論している。

李平書ノ出品ノ支那酒七種有り，内白玫瑰ハ香味佳良ニシテ，比較的ニ本邦人ノ嗜好ニ適シ，檸檬露酒及代々花酒ハ共ニ香味佳良ニシテ「リキュール」代用トシテ稍有望ナリ。花露酒ハ味佳良ナレドモ，香氣ハ本邦人ノ嗜好ニ適セズ。史國公酒ニ至テハ，香・味共ニ本邦人ノ嗜好ニ適セズ。遠年花雕ハ其ノ香氣佳良ナレドモ，味ハ本邦人ノ嗜好ニ適セザルベシ。<sup>31)</sup>

李の出品した「砂糖漬」などの食品について、審査側は「李平書出品ニ係ル砂糖漬各種ハ共ニ

30) 『東京大正博覧会審査報告』も前掲『明治前期産業発達史資料 勸業博覧会資料』に所収されている。この引用は『勸業博覧会資料』第228巻，405頁より。

31) 『勸業博覧会資料』第231巻，1013頁。

原料ノ採扱、浸方等何レモ佳良ニシテ稀レニ見ルノ良品ニ属シ<sup>32)</sup>と評価する。『東京大正博覧会審査報告』の統計によると、外国館で展示された織物の中で、中華民国の出品は出品人員が四十一、点数が四百十九、そのうち、横浜に転居した李平書の出品100点を含むという。審査報告はこれらの出品について、「其の品種は甚だ多く、殆んど中華民国の織物の種類を網羅せるものの如し。是を以て其の製造の状態及び同国に於ける嗜好の一斑を窺うに足るべく、当業者の参考として裨益尠なからざるものなり」と、コメントしている。

『東京大正博覧会審査報告』第四卷第十部の付録「外國館及官廳出品調査報告」によると、李平書の出品には、「錫製の茶入、廚庖具及食器類一式、白銅製の香爐、食器、喫煙具、洗面盤、菓子盆等」の中国「固有の物」もあれば、「匙、ホーク等の如き洋式の食器にして支那意匠を加味せるもの二、三点」、そして各種帽子、筆、墨、墨池などの文房具、彫刻漆器、家具、酒器、木彫りの工芸品などもあり、その「技工は大いに参考とするに足る」という。それらの出品の中で特に詳しく紹介されたのは、象牙で彫られた合計二十層もある「層球」という工芸品で、その絶妙な技巧に対して以上のように絶賛している。

象牙製品中、層球ト稱シ、細密ナル彫刻ヲ施シタル空洞ノ球ノ内ニ他ノ球ヲ入レ子トナシタルモノアリ。最モ多キモノハ十九個ノ球ガ層ヲナシテ入レ子トナリ、合計二十個ノ球ヨリ成レルモノアリ、妙技嘆賞ノ外ナシ。二十層球ノ如キハ、其ノ製作ニ一箇年ノ日子ヲ要スト謂フ。<sup>33)</sup>

象牙彫刻は内外の誉れの高い中国民間伝統工芸である。清朝広東人の翁五章が初めて多層象牙球を作り、近代象牙球彫刻工芸を創始した。李平書は1914年の東京大正博覧会で象牙層球を出展することによって、日本ないし世界に中国伝統工芸の巧妙奇抜さと独特な中国意匠を示した。『東京大正博覧会審査報告』は李平書の出品について、何れも中国工芸の特徴を示せるものとして、李の約七百余点の出品が皆、日中「貿易上の参考資料たるもの」であると高く評価している<sup>34)</sup>。

東京大正博覧会では外国出品者向けに、「陳列裝飾褒賞」「外國館出品紀念章」「館外特設建築物褒賞」等の賞が設けられた。外国館での出品者の中で、「中華民国物品陳列処」は「陳列裝飾

32) 同上。1014頁。

33) 『勸業博覧会資料』第234巻、1758～1759頁。

34) 同上。

褒賞」の「金牌」を、李平書の「平泉書屋」は同賞の「銅牌」をそれぞれ受賞した。<sup>35)</sup>このほか、李平書の出品した「支那産谷菽類、棉花及麻類各種」、「支那酒 白玫瑰」、「檸檬露酒」、「砂糖浸各種」、「支那産支那紙各種」、「絹織物棉織物及刺繍」、「庖廚具、食器、契煙具、酒具、花瓶、象牙製品、文房具」及び「紅木燭面矮幾別各種」等が、「外国館出品紀念章」を獲得した<sup>36)</sup>。

上記の史料から、1910年の中国の南洋勸業会と1914年の東京大正博覧会に李平書が積極的に参与した事実が記録され、李の持つ鋭敏な国際意識と商業感覚、及び工業商業発展に対する博覧会の意義への深い理解が示されている。この点については、李の若い頃に著した「護商以富国論」や、後年上海の社会改良・市政建設に力を注いだことから窺うことができる。

#### 四 李平書と日本財界

前節で言及したように、李平書は南洋勸業会開催期間中及び閉会後も近藤廉平等、日本の実業家と接触した。南洋勸業会開催時に日本が中国に派遣した考察団の日記『赴清実業団誌』を巻くと、李平書と当時の日本財界人が接触していたことを垣間見ることができる。

『赴清実業団誌』は赴清実業団が中国から帰国後、団員の永井久一郎（横浜商工会議所特別議員）、白岩龍平、白石重太郎（東京商工会議所書記長）の三人によって編著され、1910年5月5日下関を出発して7月上旬に帰国するまでの二ヶ月の間に、実業団一行が北京、上海等12の都市を訪問した具体的な活動状況を記録したものである。それによると、南洋勸業会開幕直後の6月11日に開催地である南京に到着した実業団一行を歓迎するために、11日の夜に南洋大臣張人駿が招待宴会を開いた。坐辦陳琪ら官僚とともに、勸業会「董事会長」をしている李平書も当然列席した。主賓合わせて六十人あまりの宴会は「頗る歓待を極め」、「彼此情意融洽」「歓を尽くし」という<sup>37)</sup>。6月16日、実業団一行は滬寧鉄道列車に乗って上海に赴いた。17日夜に日本駐上海総領事の吉明主催の歓迎レセプションが開かれ、実業団一行以外に、日中の実業家や官僚、名士、報道関係者等一百三十四人が列席したが、出席者リストに「工程局総辦李鐘珪」即ち李平書の名も見える<sup>38)</sup>。6月21日、実業団は再び滬寧鉄道で蘇州に赴く際、ちょうど「上海商務總會會員李鐘珪氏勸業会董事会長の用務にて南京に赴く」に会したので、李平書と実業団

35) 『東京大正博覧会受賞人名録附録』、東京大正博覧会編『東京大正博覧会出品審査概況 附・受賞人名簿』（東京大正博覧会紀念帖刊行会、1914年）所収、24頁。

36) 前掲『東京大正博覧会受賞人名録附録』、1頁、2頁、3頁、4頁、6頁。

37) 赴清実業団誌編纂委員編『赴清実業団誌』（博文館、1914年）、124頁。

38) 前掲『赴清実業団誌』、162頁。

一行は同車で北上した<sup>39)</sup>。実業団は至るところで当地の官僚や名士から歓迎された。日中双方は「実業提携」、「東アジアの平和」、「唇齒輔車」の日清善隣関係の発展を目標として互いの交流を深めた。

今回の訪清で実業団一行は中国側から厚いもてなしを受けた。それと同時に中国各地に考察団を結成して日本実業団の来訪への答礼として日本を訪問したいという声もあったので、帰国後、元実業団団長近藤廉平の推し進めで、東京、横浜、名古屋、京都、大阪、神戸の六つの都市の商業会議所が連名で招待状を出し、中国「赴日考察実業団」を組織して1911年10月に来日させる予定だった。この「赴日考察実業団」の構成員は中国各地の商業界から来ているが、李平書は主要メンバーの一人である。

表2 赴日考察実業団団員（上位八名）

	氏名	選出地方	職名	年齢
正会長	沈仲禮	上海	上海商務總會議董 中国紅十字会総董	五十三歳
副会長	趙研農	北京	京師商務總會総理	五十八歳
団員	周金箴	上海	上海商務總會総理	六十五歳
	楊信之	同	上海繭絲公所総董	六十歳
	邵琴濤	同	上海商務總會協理	四十六歳
	李平書	同	全国商団聯合会長	五十九歳
	史量才	蘇州	江蘇女子蠶業学堂総理	三十三歳
	郭禮徵	鎮江	南洋勸業会調査員	三十七歳
	葉鴻英	福州	源昌銀号総理	五十二歳

しかし、六十数名の団員が1911年10月24日に日本郵船会社の定期船「春日丸」に乗船して上海から出発する予定だったが、その直前に辛亥革命が勃発したため、考察団の「赴日考察」は「無期延期」になってしまった<sup>40)</sup>。この件が再び提起されたのは中華民国成立後の1913年2月。清末の「赴日考察実業団」と民国初年の「赴東考察実業団」の両方の団員名簿を比べてみると、団員の大部分は同じであることに気がつくが、しかし、李平書の名前は名簿に記載されていない

39) 前掲『赴清実業団誌』、184頁。

40) 「赴清実業団誌別誌 赴日考察実業団の組織と出発延期」、前掲『赴清実業団誌』、235～243頁。表2はこの資料の238頁に依拠したものの。

い。恐らく当時の李平書はすでに日本に亡命していたからであろう<sup>41)</sup>。

実際には、日本「赴清実業団」の訪中は三つの目的がある。(一)日清実業家の接近、(二)清国有力実業家の来日招請、(三)日清人共同事業喚起の誘因たらしめることなど<sup>42)</sup>。清国訪問の最後の都市上海で、1910年6月20日、近藤廉平団長、白岩龍平、松方幸次郎と上海商務總會総理周金箴、李平書、王一亭及び上海総領事有吉明がひそかに葉子衡宅に集まって、将来日中間の共同事業を推し進めるための日中実業家連絡機構を設立することを協議した。この協議の達成は、渋沢栄一が長期間構想していた「日清実業界提携」に向けて大きく一步踏み出したと言える<sup>43)</sup>。だが、辛亥革命以後になると、この事業における李平書の参与は主に「中国興業株式会社」(中国で「中国興業公司」と称される)という日中合弁企業の創立過程に見られる。

中国興業株式会社は日本側が1913年来日中の孫文に提案して、孫文と渋沢栄一が共同で設立した合資企業であり、近代日中政府間で一番最初に設立された合資企業でもあった。この会社の創設は中華民国臨時大統領解任後の孫文によって提起された「実業救国」と日本財界の「対中進出」が結びついた結果と考えられる<sup>44)</sup>。中国興業株式会社創立までの間及び創立当初において、李平書は頻繁に登場していた。

まず、1913年2月21日の夜、三井物産の集会所で中国興業株式会社第一回発起人大会が開かれた。日本側には渋沢栄一、大倉喜八郎等が、中国側には孫文、戴季陶等が出席した。この会議で中日両国の発起人が次のように決まった。中国側発起人は、孫文、印錫璋、李平書、顧馨一、張静江、周金箴、朱葆三、沈縵雲、宋嘉樹、龐春城、王一亭。日本側は、渋沢栄一、大倉喜八郎、安田善次郎、倉知鐵吉、益田孝、三村君平、中橋徳五郎、山本條太郎となる<sup>45)</sup>。

その後間もなく、宋教仁が暗殺され、孫文は反袁闘争をしながら、日本財界と政府の支援を得るために中国興業株式会社の準備を急いでいた。1913年4月3日、5日、9日、孫文はそれぞれ中国側の第一回、第二回、第三回発起人会議を開いた。李平書はその中の第二回、第三回会議に確実に出席していたことが確認できる<sup>46)</sup>。

ところが、第二革命(二次革命)のため、中国側発起人の孫文、李平書、沈縵雲、王一亭らは皆指名手配され、外国亡命あるいはしばらく蟄居するという羽目に陥った。それにもかかわ

41) 野澤豊「辛亥革命と産業問題」、『人文学報』154巻(東京都立大学人文学部、1982年3月)144頁。

42) 同上、120頁。

43) 李廷江「渋沢栄一と近代中国 一大正初期を中心に」、陶徳民等編『近代日中関係人物史研究の新しい地平』(雄松堂出版、2008年)所収、211~213頁。

44) 李廷江『日本財界と近代中国』(御茶の水書房、2003年)、238~239頁。

45) 同上、244頁。

46) 同上、270-271頁。

中国興業株式会社支那側株式一覽表	
氏名	株数
孫文	4800
周金箴	4400
印錫璋	4000
朱葆三	3400
黃興	800
李平書	600
王一亭	3400
沈縵雲	4000
張人傑	4000
顧壽	4000
戴天	4000
張	4000
沈	4000
縵	4000
雲	4000
張	4000
人	4000
傑	4000
顧	4000
壽	4000
戴	4000
天	4000
張	4000
沈	4000
縵	4000
雲	4000
張	4000
人	4000
傑	4000
顧	4000
壽	4000
戴	4000
天	4000
張	4000
沈	4000
縵	4000
雲	4000
張	4000
人	4000
傑	4000

図3 中国興業株式会社中国側株式一覽表

らず、動揺する中国政治情勢の中で数ヶ月の準備を経て、1913年8月11日に中国興業株式会社がようやく正式に成立した。当日、会社の中国側株式の株数が確定された。外務省の史料によると、図3で示されるように、1913年8月11日当時において中国側総株数は25000株、その中に、孫文4800株、周金箴4400株、印錫璋4000株、王一亭3400株、朱葆三3400株、黄興800株、李平書600株<sup>47)</sup>。李平書の株数から見ると、中国側の株主の中で七位であることがわかる。

実は、8月11日前に、中国側株主各位の資産状況や信用度などについて、日本外務省は秘密裏に調査を行いそれぞれ評価を下していた。これは、当時上海総領事館総領事の有吉明が外務省宛の「中国興業株式会社

支那側出資者ニ関シ問合ノ件回答」と題した極秘ファイルから分かる。中国側株主の8人は何れも国民党あるいは南北政争と関係のある人物であるため、混乱不穏な中国情勢の中で中国側の出資が確保できるかどうか、日本側は不信を抱き、この機密ファイルを通して株主の王一亭、李平書、沈縵雲の三人を、「信用程度」・「資産」・「一般商人との関係」という三つの面から詳細に調査して記述した<sup>48)</sup>。当時の李平書は日本に亡命してきたばかりで、神戸の葉子衡宅に寄寓していた。このファイルは、李の経歴や、1913年当時所有する資産状況、及び辛亥革命における李の功績について詳細に紹介するとともに、李の名声と信用は上海商会にあるだけでなく、寧ろ上海の公共団体により現れているとして、李の信用度を高く評価している<sup>49)</sup>。

しかし、中国興業株式会社を創立してまもなく、第二革命が失敗して、孫文と黄興らが日本に亡命する。よって孫文は中国側代表として会社の総裁に就任することができなくなる。同時に日本財界も、中国南北両派の闘争こそ日本の中国進出のチャンスだとして、孫文との協力関係をストップして北京政府と協力するように方向転換した。これにより中国興業株式会社は改組せざるを得なくなり、南方革命派と関連のある李平書、王一亭、沈縵雲らは皆やむを得ず辞任して、この事業から撤退してしまった。

47) 『中国興業株式會社支那側株式一覽表』、外務省記録『中日實業會社關係雜纂 第一卷』所収、図3はその173頁によるものである。アジア歴史資料センター <http://www.jacar.go.jp/>, reference code: B04011208900。

48) 同上、「中国興業株式會社支那側出資者ニ関シ問合ノ件回答」、178～190頁。

49) 同上、183～185頁。



その後、李平書は日本で金石や文芸に没頭した亡命生活を送り、1916年の春上海に戻るまでの間に、日本財界と再び接触したことはなかったようである。そして、李平書の『且頑老人七十歳自叙』には中国興業株式会社創立という事業に参加したことが一言も言及されていない。これは、この事業が志半ばにして終わってしまったこと、そして南方革命派の失敗などに対する李平書の深い失意によるものであろう。

## 五 おわりに

以上に述べたように、名高い上海士紳の李平書は辛亥革命に参加した資本家として、数回も日本に渡り、日本の財界人と接触していた。第二革命勃発後、日本で三年間近くも亡命生活を送った李にとって、日本との縁は本当に深いものであった。国内外所蔵の史料を考察することによって、李平書が南京での南洋勸業博覧会と東京大正博覧会という20世紀初頭の中国と日本による二回の大規模な博覧会に積極的に参加した史実を知ることができた。李は南洋勸業会のさまざまな会務に携わっただけではなく、日本にいる間に東京大正博覧会で中国の特色ある商品を多く出品した。これによって李は、民国時代に国際的な博覧会において個人名義で出品・参加した第一人者となる。これらの事実から、李の鋭敏な国際感覚と商業意識が示されると同時に、清末民国初期上海「紳商」の代表人物としての李平書が当時日中両国の「経済提携」及び「国民外交」に対して果たした役割も語られているのである。

李平書が日本と深い縁を結んだのは、李平書本人の言葉を援用すると、李が「素より中日親善主義を持っている」（素持中日親善主義）<sup>50)</sup> からと考える。1880年代において、李は早くも漢学者の岡千仞と交流したことがあった。岡千仞は興亞論者で、西洋に抵抗するための「日清提携」を熱く提唱する。李平書も1884年「興亞策」五編を著し、『字林滬報』に掲載した。岡千仞が中国遊歴で上海に来た際には、二人は面会して「引かれて同志となる」（引為同志）。後に「中日固交以拒俄論」を著し、その「聯日拒俄（露）」の主張が「いずれも日本人から賛同を得ている」（「俱為日人賛同」という<sup>51)</sup>。このように李の「興亞策」は明治日本的「恐露（俄）」意識や明治期の興亞論即ち初期アジア主義とある程度共鳴していたからこそ、李平書は多くの日本人の友人と出会えて、第二革命後多方面の援助を得て日本に三年近くも滞在することができた

50) 『自叙』、527頁。

51) 例えば、李は「中日固交以拒俄論」において、日本の興亞会に言及し、その興亞主義に期待を見せている。日本亡命期間中に作られた「平泉愛群歌」にも、「方今世界重人種、同種相親異種疏」とのような語句もあり、其の意味は日中の親善連合を期待するものと見られる。この点について、筆者は別紙で論述する。

のである。

「倒袁」の志を抱えて日本から帰国した李平書は、結局党派闘争の政局に失望して政治に足を踏み入れないことにしたが、しかし心の中で政局や時勢にはやはり気を配り、実現させていない大志を消耗しつつ悶々とした日々を送っていた（「強顔歓楽、壯志消磨」。五回目の来日の際に作られた「隔岸櫻花晚更妍，遠山松柏欲參天。水聲瀾瀾憑欄聽，沁入心脾萬慮捐」<sup>52)</sup> という詩を見ると、当時の李平書にとっての日本は、すでに憂いを忘れさせる桃源郷のような存在になったと言えよう。

---

52) 『自叙』、577頁。